

○ 第 1 章 簿記の基礎

1-1 簿記ってなあに？

今から皆さんが学習を始める簿記とはいったい何なのか？まずは簿記について知ることから始めましょう。

簿記は「帳簿記録」の略と言われており、皆さんは今から様々な経済活動を帳簿に記録する方法を学習していきます。しかし多くの方はすでに「簿記」を行ったことがあるはずです。思い出してください。小さい頃、おこづかい帳という帳簿に、おこづかいという収入と、お菓子代・文房具代などの支出を記録し、貯金箱の中の現金を管理していませんか？それこそが簿記なのです！！

しかし、ここでいう簿記とは**営利目的で活動する企業**が行う簿記です。家庭の収支だけを管理する簿記よりも、記録する経済活動の範囲が広がり複雑になります。また後述しますが、企業の行なう簿記は多くの利害関係者の意思決定に影響を及ぼします。そのため、帳簿への記録方法も少し複雑なルールに則って行わなければなりません。簿記 3 級では、この企業の行なう簿記について学習していきましょう！

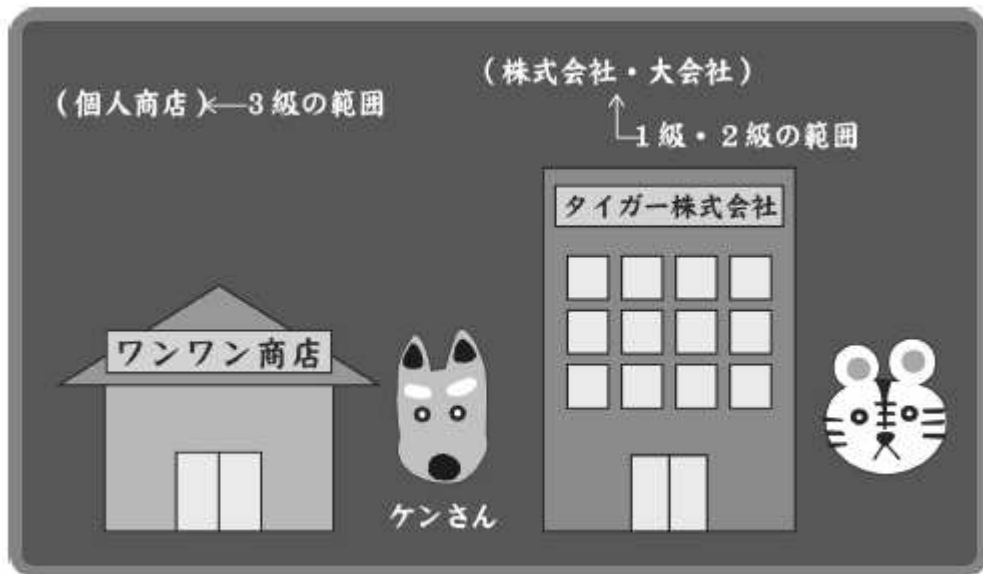
1-2 簿記の種類

簿記を行う主体（経済主体）には、家庭・営利企業・非営利法人・国や地方公共団体などが含まれ、それぞれの目的を達成するために異なった簿記を行っています。簿記検定の範囲である営利企業は、個人商店・株式会社・大会社と規模が大きくなっていきます。

また記帳対象や方法の違いによって、**単式簿記**と**複式簿記**の 2 種類の簿記があります。単式簿記は上述したおこづかい帳や家計簿のように、一定の財産等のみを記録する簿記です。それに対して企業の行なう簿記は複式簿記であり、すべての財産の変動やその原因を常に二面的にとらえて記録していきます。ここからは簿記というと複式簿記を指すと考えてください。

この企業が行なう複式簿記もまた、商品販売業などで用いられる**商業簿記**と製造業などで用いられる**工業簿記**に分けられます。

さまざまな視点でいくつかの種類に分けられる簿記ですが、3 級の範囲は商品販売業を営む個人企業（個人商店）の複式簿記になります。



～ちょっと補足～

2級以降になると、個人企業ではなく、株式会社・大会社の行う簿記に範囲が拡大されます。また、製造業を営む企業が行う工業簿記も学習の範囲になってきます。

1-3 簿記の目的

簿記の目的の一つは、おこづかい帳のときにも考えていたような財産の管理です。しかし、企業にとっての利害関係者は、経営者だけでなく株主などの投資者や、金融機関などの債権者、従業員、税金を納める国や地方公共団体など多数存在します。その利害関係者に財産の状況や損益（もうけ）を報告することも簿記の重要な目的です。なぜなら、出資を行うか、お金を貸すか、その企業で働くか、正しく納税されているかなど、それぞれの利害関係者が意思決定を行う際の重要な資料となるからです。利害関係者から信頼されるために、企業は現時点でどれだけの財産があるか（**財政状態**）と1年間でどのようにいくら利益（損失）が出たか（**経営成績**）を報告するために簿記が必要になるのです。

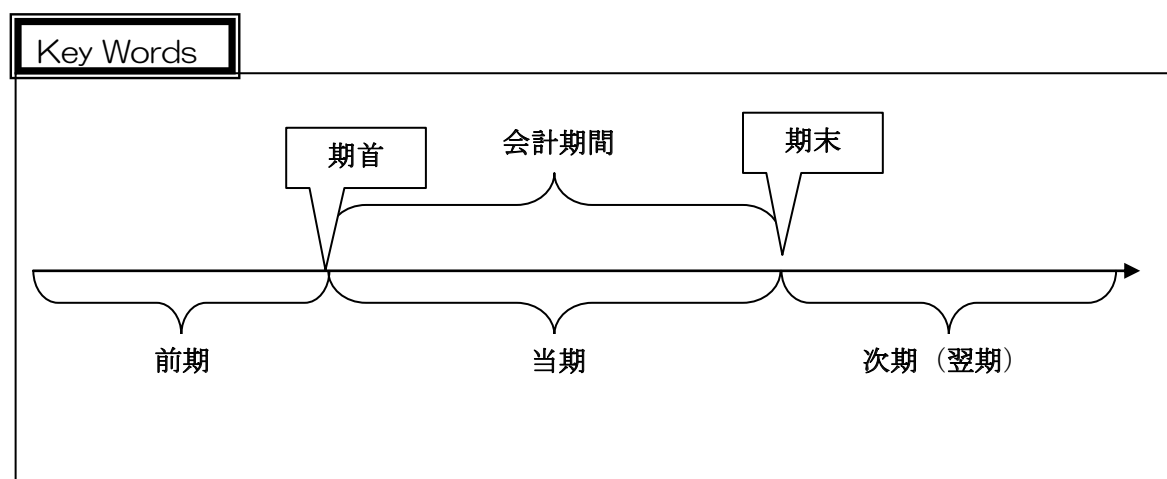
理解しよう！

簿記の目的

- ①日々の経済活動を記録することで、企業の財産管理を行うため。
- ②利害関係者が意思決定できるように、企業の財政状態と経営成績を報告するため。

1-4 簿記で作成する報告書

2つ目の目的を果たすためには、どこかで報告書を作成する必要があります。しかし、企業は倒産するつもりで活動を行っていません。つまり、継続して経済活動が行われますので、どこかで人為的に区切りをつけて報告しなければなりません。簿記では、1年に1回や半年に1回など、人為的に区切った期間を**会計期間**と呼び、その始まりの日を**期首**、終わりの日を**期末**と呼びます。また、現在の会計期間を**当期**、1つ前の期間を**前期**、1つ後の期間を**次期（翌期）**と呼びます。



簿記は様々な帳簿に日々の取引を勘定科目（後述）と金額によって記録しますが、それは最終的に報告書を作成するための手続ともいえます。例えば1年に1回報告書を作成する際に、1年間の取引内容をすべて覚えていることは不可能でしょう。だからこそ日々記録を行い、その記録をもとに報告書を作成していきます。この報告書を**財務諸表**と呼び、財務諸表には**貸借対照表**と**損益計算書**のふたつの報告書が含まれます。

1-5 貸借対照表 (Balance Sheet :B/S)

貸借対照表とは、プラスの財産である**資産**とマイナスの財産である**負債**、その差額で正味の財産である**純資産**を表すことで、企業の**期末時点の財政状態**を明らかにする報告書です。このような一時点の情報は**ストック情報**と呼ばれます。

① 資産

資産とは、現金や土地、建物などの物的財産と将来現金等として回収できる債権をいいます。イメージとしては上記にも記載したようにプラス（正）の財産であり、具体的には以下のようなものが挙げられます。

現金	硬貨や紙幣、通貨代用証券（後述）
普通預金	銀行に普通預金として預け入れている預金
商品	販売目的で保有する物品
土地	営業のために使用する目的で保有する店舗、倉庫、駐車場などの敷地
建物	営業のために使用する目的で保有する店舗、倉庫、事務所などの建築物
備品	営業のために長期間使用する机、いす、棚、パソコンなど
売掛金	商品を掛取引で販売した際の未収の代金で、後日回収可能な債権
貸付金	他人に金銭を貸し付け、後日返済してもらえる債権

この項目を**勘定科目**として使用します。

② 負債

負債とは、後日支払いを行わなければならない債務であり、イメージとしてはマイナス（負）の財産です。具体的には以下のようなものが挙げられます。

買掛金	商品を掛取引で購入した際の未払いの代金で、後日支払わなければならない債務
借入金	他人から金銭を借り入れ、後日返済しなければならない債務

③ 純資産

純資産とは、資産から負債を差し引いた正味の財産であり、個人企業では店主の元入れ分と企業が生み出した利益が含まれます。3級では、それらがすべて「**資本金**」として表されます。

覚えよう！！

純資産＝資産の合計－負債の合計

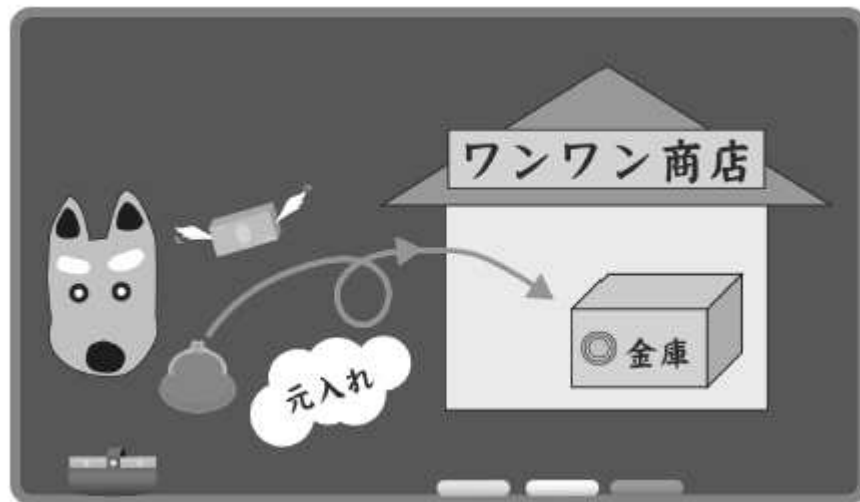
↑

3級では、純資産のグループには「**資本金**」しか出てきません！！

Key Words

「元入れ」

簿記のルールとして、店主個人の財産と商店の財産は明確に区別しなければなりません。したがって個人商店を始めようとする場合、店主個人の財産から商店に財産を出資しなければなりません。これを「元入れ」といいます。



貸借対照表は、資産・負債・純資産のグループが以下の形で左側と右側に記載され、左右の金額が一致します。英語ではバランス・シートと呼ばれます。

資産 = 負債 + 純資産

貸借対照表

資産 のグループ	負債 のグループ
	純資産 のグループ

～例題 1～

ワンワン商店の平成×0年 12月 31日の資産と負債の状況は以下の通りです。純資産の金額を求めるとともに、貸借対照表を作成しましょう。

現金 50,000円 借入金 250,000円 普通預金 100,000円
 土地 300,000円 建物 200,000円

～解説～

資産：現金 50,000円 + 普通預金 100,000円 + 土地 300,000円 + 建物 200,000円 = 650,000円

負債：借入金 250,000円

資産合計 650,000円 - 負債合計 250,000円 = 純資産 400,000円

単位は必ず確認し
ましょう！

期末日

貸借対照表

	ワンワン商店	平成×0年 12月 31日			(単位：円)
商店名	資 産	金 額	負債および純資産	金 額	
現	金	50,000	借 入 金	250,000	
普 通 預	金	100,000	資 本 金	400,000	
土 地	地	300,000			
建 物	物	200,000			
		650,000			650,000

必ず一致します！

1-6 損益計算書 (Profit and Loss Statement :P/L)

損益計算書とは、企業の1年間の経営活動の結果生じた稼ぎである**収益**と、その稼ぎを得るために払った犠牲である**費用**を対応させ、一年間の儲けである**当期純利益**（もしくは**当期純損失**）を明確にすることで、**一定期間（多くの場合1年間）の経営成績**を明らかにする報告書です。このように一定期間の情報は**フロー情報**と呼ばれます。

① 収益

収益とは、企業の活動の結果として純資産を増加させる原因をいいます。イメージとしては企業が頑張って稼ぎ出したものと考えてください。具体的には以下のものが挙げられます。

受取手数料	取引の仲介など仕事を行い受け取った手数料
受取利息	金銭の貸付けや預金などで受け取った利息
商品売買益	安く仕入れた商品を高く販売し得られた利益

② 費用

費用とは、企業の活動の結果として純資産を減少させる原因をいいます。イメージとしては企業が収益を稼ぎ出すために必要で犠牲となったものと考えてください。具体的には以下のものが挙げられます。

給料	従業員の働きに対して支払った給料
支払家賃	建物を借りていて支払う賃借料
消耗品費	文房具など短期間に使用する消耗品の代金
広告宣伝費	広告やチラシで宣伝を行う代金
水道光熱費	電気、ガス、水道代など
旅費交通費	電車、バス、タクシー代など
通信費	電話料金、切手・はがき代など
雑費	お茶代、新聞購読料、その他
支払利息	他人にお金を借りて支払った利息

損益計算書は、収益が右側、費用が左側に以下のように記載され、左右の金額の差が**当期純利益**（または**当期純損失**）となります。

$$\text{収益} - \text{費用} = \text{当期純利益} \quad (\text{マイナスの場合} \Rightarrow \text{当期純損失})$$

損益計算書

費用 のグループ	収益 のグループ
当期純利益 (差額)	

損益計算書

費用 のグループ	収益 のグループ
	当期純損失 (差額)

～例題 2～

ワンワン商店の平成×1年1月1日～12月31日に発生した収益と費用は以下の通りです。当期純利益の金額を求めるとともに、損益計算書を作成しましょう。

商品売買益 15,000円 給料 12,000円 支払利息 3,000円
 通信費 2,000円 受取手数料 10,000円

～解説～

収益：商品売買益 15,000円 + 受取手数料 10,000円 = 25,000円

費用：給料 12,000円 + 通信費 2,000円 + 支払利息 3,000円 = 17,000円

収益合計 25,000円 - 費用合計 17,000円 = 当期純利益 8,000円

単位は必ず確認し
 ましょう！

商店名

当期会計期間

損益計算書

ワンワン商店	平成×1年1月1日～平成×1年12月31日	(単位：円)	
費用	金額	収益	金額
給料	12,000	商品売買益	15,000
通信費	2,000	受取手数料	10,000
支払利息	3,000		
当期純利益	8,000		
	25,000		25,000

当期純利益は左・右の金額の差額
 (赤字で書かれる場合もあります。)

理解しよう！

<簿記の目的>：利害関係者のために

1年間でどのようにいくら儲けたか（利益 or 損失）を明らかにする「**損益計算書**」

決算日時点の財産の状況を明らかにする「**貸借対照表**」

この2つの報告書を作成するために帳簿に記録を行う
=簿記の目的

覚えよう！！

貸借対照表

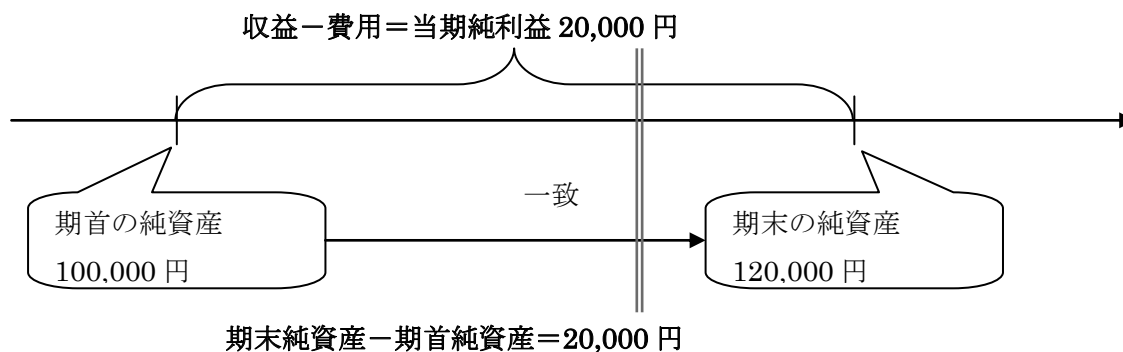
資産 プラス財産、後で回収できる権利 (ex.)現金、土地、建物、貸付金	負債 マイナスの財産、後で返さなければならない義務 (ex.)借入金
	純資産 資産と負債の差額 (ex.)資本金 ・店主の元入れ金（出資） ・企業の生み出した利益

損益計算書

費用 商売を行うために必要な犠牲、純資産を減らす原因になるもの (ex.)給料、水道光熱費、通信費	収益 企業の稼ぎ、純資産を増やす原因となるもの (ex.)受取手数料、商品売買益
--	---

資産、負債、純資産、収益、費用を**簿記の5要素**と呼びます。

1年間企業が経済活動を行った結果、当期純利益が生じた場合、その利益は次期以降企業が活動を行うための原資となっていきます。ここで純資産の定義を思い出してみると、純資産には店主が元入れした金額だけでなく、企業が生み出した利益も含まれました。したがって、当期純利益は純資産を増加させることとなります。



～応用～

(追加出資や引出しが無かった場合) 当期純利益は2つの方法で求めることができます。

- ・ 収益-費用=当期純利益 ←この方法を**損益法**といいます。
- ・ 期末純資産-期首純資産=当期純利益 ←この方法を**財産法**といいます。

～例題3～

ワンワン商店の平成×1年12月31日時点の資産、負債の状況は以下の通りです。当期末時点の貸借対照表を作成するとともに、例題1（前年末）の貸借対照表と例題2（当期）の損益計算書を参考に貸借対照表と損益計算書の関係を説明しましょう。

現金 88,000円 普通預金 70,000円 土地 300,000円
 建物 200,000円 借入金 250,000円

～解説～

平成×1年12月31日の貸借対照表は以下の通りである。

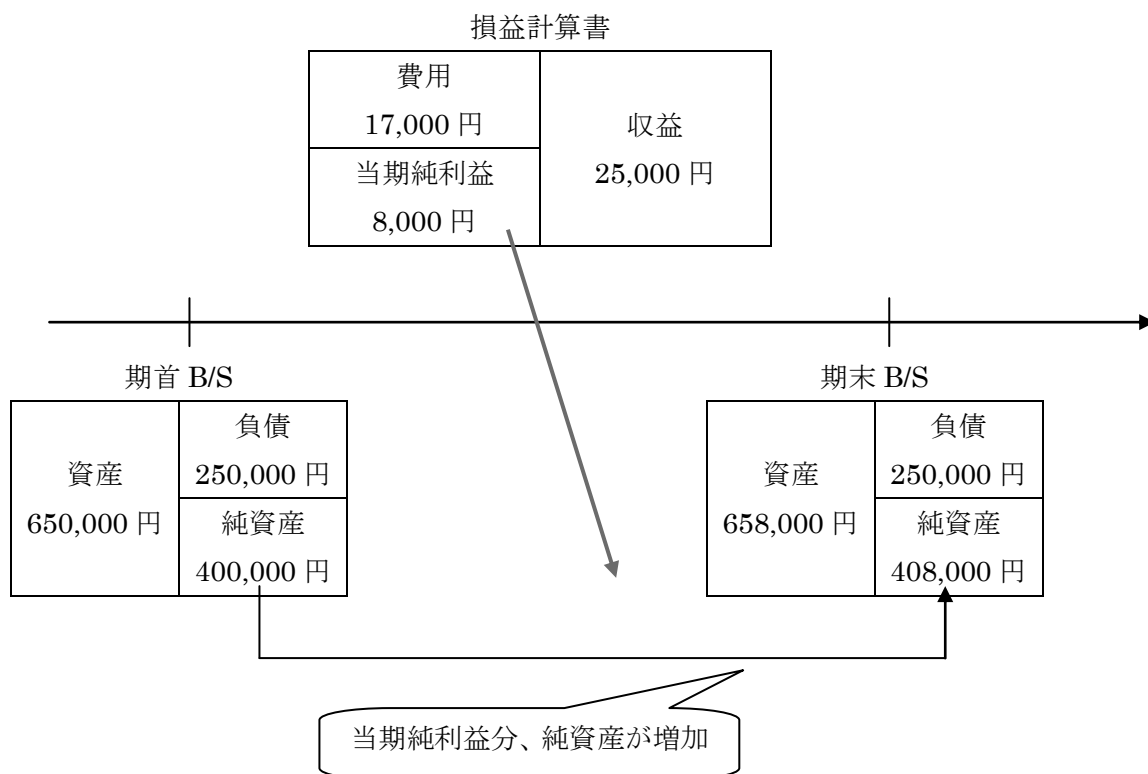
貸借対照表

ワンワン商店 平成×1年12月31日 (単位：円)

資 産		金 額	負債および純資産		金 額
現	金	88,000	借	入	250,000
普	通 預 金	70,000	資	本	408,000
土	地	300,000			
建	物	200,000			
		658,000			658,000

左右の差額で資本金の金額を求めます。

したがって、期首・期末の貸借対照表と当期の損益計算書の関係は以下のようになる。



～ちょっと補足～

3級では、期末貸借対照表の純資産の部をより明瞭にするために、期首の資本金の金額と当期純利益を区別して記載します。その場合、例題3の貸借対照表は以下のようになります

貸借対照表

ワンワン商店

平成×1年12月31日

(単位：円)

資 産		金 額	負債および純資産		金 額			
現	金	88,000	借	入	金	250,000		
普	預	70,000	資	本	金	400,000		
土	地	300,000	当	期	純	利	益	8,000
建	物	200,000						
		658,000						658,000

損益計算書で計算された利益

期首の資本金

＝章末練習問題 1－1＝

東京商店の平成×年 12 月 31 日の資産と負債の状況は以下の通りである。貸借対照表を作成しなさい。

現金 160,000 円 借入金 80,000 円 普通預金 110,000 円
 商品 200,000 円 備品 300,000 円 買掛金 200,000 円
 売掛金 270,000 円

貸借対照表

東京商店 平成×年 12 月 31 日 (単位：円)

資産	金額	負債および純資産	金額

＝解答＝

貸借対照表

東京商店 平成×年 12 月 31 日 (単位：円)

資産	金額	負債および純資産	金額
現金	160,000	買掛金	200,000
普通預金	110,000	借入金	80,000
売掛金	270,000	資本金	760,000
商品	200,000		
備品	300,000		
	1,040,000		1,040,000

＝解説＝

資産合計＝現金 160,000 円＋普通預金 110,000 円＋売掛金 270,000 円＋商品 200,000 円＋備品 300,000 円＝1,040,000 円

負債合計＝買掛金 200,000 円＋借入金 80,000 円＝280,000 円

資産合計 1,040,000 円－負債合計 280,000 円＝資本金 760,000 円

＝章末練習問題 1－3＝

京都商店の平成×5年12月31日時点での資産・負債の状況、および同年中に発生した収益と費用は以下の通りである。期末の貸借対照表と損益計算書を作成しなさい。

また、期首（平成×5年1月1日）の純資産の金額も答えなさい。

現 金	50,000 円	消 耗 品 費	2,000 円	売 掛 金	60,000 円
普 通 預 金	40,000 円	受 取 利 息	20,000 円	支 払 利 息	3,000 円
給 料	50,000 円	買 掛 金	40,000 円	雑 費	1,000 円
借 入 金	30,000 円	広 告 宣 伝 費	5,000 円	商 品	20,000 円
貸 付 金	20,000 円	水 道 光 熱 費	3,000 円	商 品 売 買 益	100,000 円

貸 借 対 照 表

京都商店 平成×5年12月31日 (単位：円)

資 産	金 額	負債および純資産	金 額
		資 本 金	
		当 期 純 利 益	

損 益 計 算 書

京都商店 平成×5年1月1日～平成×5年12月31日 (単位：円)

費 用	金 額	収 益	金 額

貸借対照表

京都商店 平成×5年12月31日 (単位：円)

資 産		金 額	負債および純資産		金 額	
現	金	50,000	買	掛	金	40,000
普	通	預	借	入	金	30,000
金		40,000	資	本	金	64,000
売	掛	金	当	期	純	利
		60,000	益			56,000
商	品	20,000				
貸	付	金				
		20,000				
		190,000				190,000

損益計算書

京都商店 平成×5年1月1日～平成×5年12月31日 (単位：円)

費 用		金 額	収 益		金 額			
給	料	50,000	商	品	売	買	益	100,000
広	告	宣	受	取	利	息		20,000
伝	費	5,000						
水	道	光						
熱	費	3,000						
消	耗	品						
費		2,000						
雑		費						
		1,000						
支	払	利						
息		3,000						
当	期	純						
利	益	56,000						
		120,000						120,000

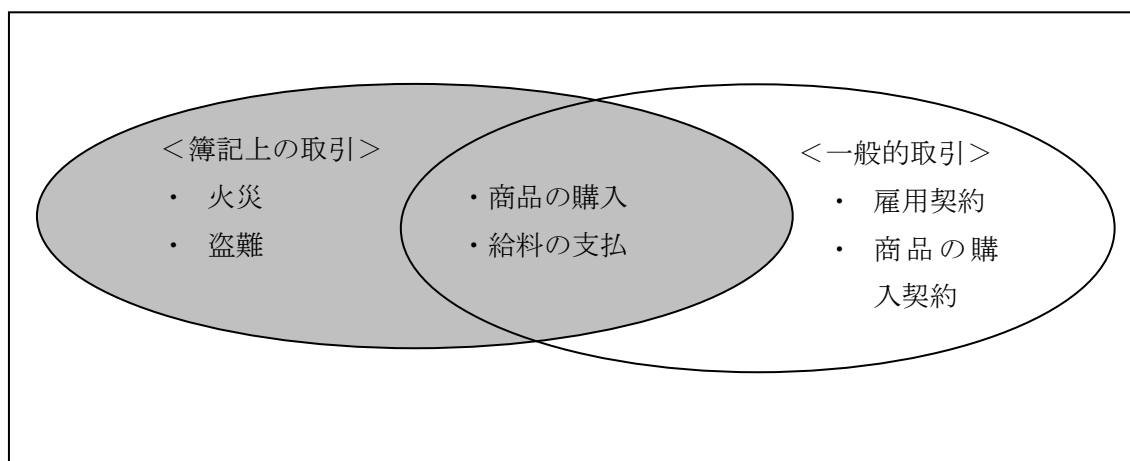
損益計算書の貸借差額で当期純利益を求めると 56,000 円になります。その当期純利益を貸借対照表に記載し、貸借対照表の貸借差額で資本金の金額を算出しましょう。本問は純資産の部を当期首の資本金と当期純利益を区別していますので、**期首の資本金の金額が 64,000 円**であったことになります。

○ 第 2 章 記帳方法

2-1 簿記上の取引

前章で学習したとおり、最終的には貸借対照表と損益計算書を作成しなければなりません、1年間の出来事をすべて覚えておくことはできないので日々の取引を帳簿に記録しなければなりません。

ここで記録すべき「取引」について考えていきましょう。一般的に取引という言葉を使う場合は、商品を購入するという取引、従業員を雇用する契約を結ぶ取引などが含まれます。しかし、簿記において記録すべきなのは、簿記の5要素、つまり、**資産、負債、純資産、収益、費用の増減**です。よって、契約を結ぶだけでは簿記上の取引にはあたりません。また、火災や盗難などで建物や現金などが失われた場合、一般的には取引とは呼びませんが、建物や現金などの資産が減少するため簿記上では取引として記録が必要になります。



2-2 勘定

簿記の5要素を記録、計算するために**勘定 (account : a/c)** というものを使用します。勘定とは T 字の形で表され、左と右に分けられます。貸借対照表や損益計算書も左右に二分割されていましたね。複式簿記ではこの考え方がよく登場し、左側のことを「借方 (かりかた)」、右側のことを「貸方 (かしかた)」と特殊な呼び方をするので覚えましょう。

覚えよう！！

簿記では、
☆「左側」のことを「借方」
☆「右側」のことを「貸方」
と呼びます。



例えば、資産の代表的な項目である「現金」は以下のように勘定記入されます。

(借方)	現	金	(貸方)
1/1	100,000	3/25	30,000
7/10	50,000	10/20	15,000
11/30	40,000		

勘定に書かれる項目の名称を「**勘定科目**」と呼びます。資産の勘定である「現金」は増加すると借方に記入し、減少すると貸方に記入するというルールがあります（後述）ので、この勘定は **1/1 に 100,000 円増加した現金が、3/25 に 30,000 円減少し、7/10 に 50,000 円増加し、10/20 に 15,000 円減少し、11/30 に 40,000 円増加した**ことを示します。

このように文章で書くと煩雑になりがちな現金の動きが、勘定では非常に見やすくまとまっていることがわかりますね。よって、このまま 12/31 の期末を迎えた場合の残高も以下のように簡単に計算できます。

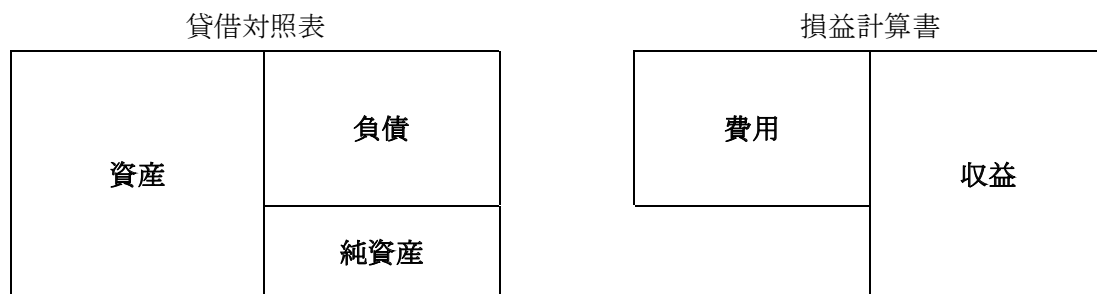
- ・借方合計（増加分の合計）
100,000 円 + 50,000 円 + 40,000 円 = 190,000 円
- ・貸方合計（減少分の合計）
30,000 円 + 15,000 円 = 45,000 円
- ・借方合計 190,000 円 - 貸方合計 45,000 円 = 期末残高 145,000 円

勘定において残高を計算し、貸借を一致させてまとめることを**締切り**といいます。

(借方)	現	金	(貸方)
1/1	100,000	3/25	30,000
7/10	50,000	10/20	15,000
11/30	40,000	12/31 (貸借差額)	145,000
	190,000		190,000

合計線は一本線で、
締切線は二本線で引くよ！

資産、負債、純資産、収益、費用のそれぞれの勘定には記入のルールがあります。まずは、貸借対照表と損益計算書の雛形を思い出してください。



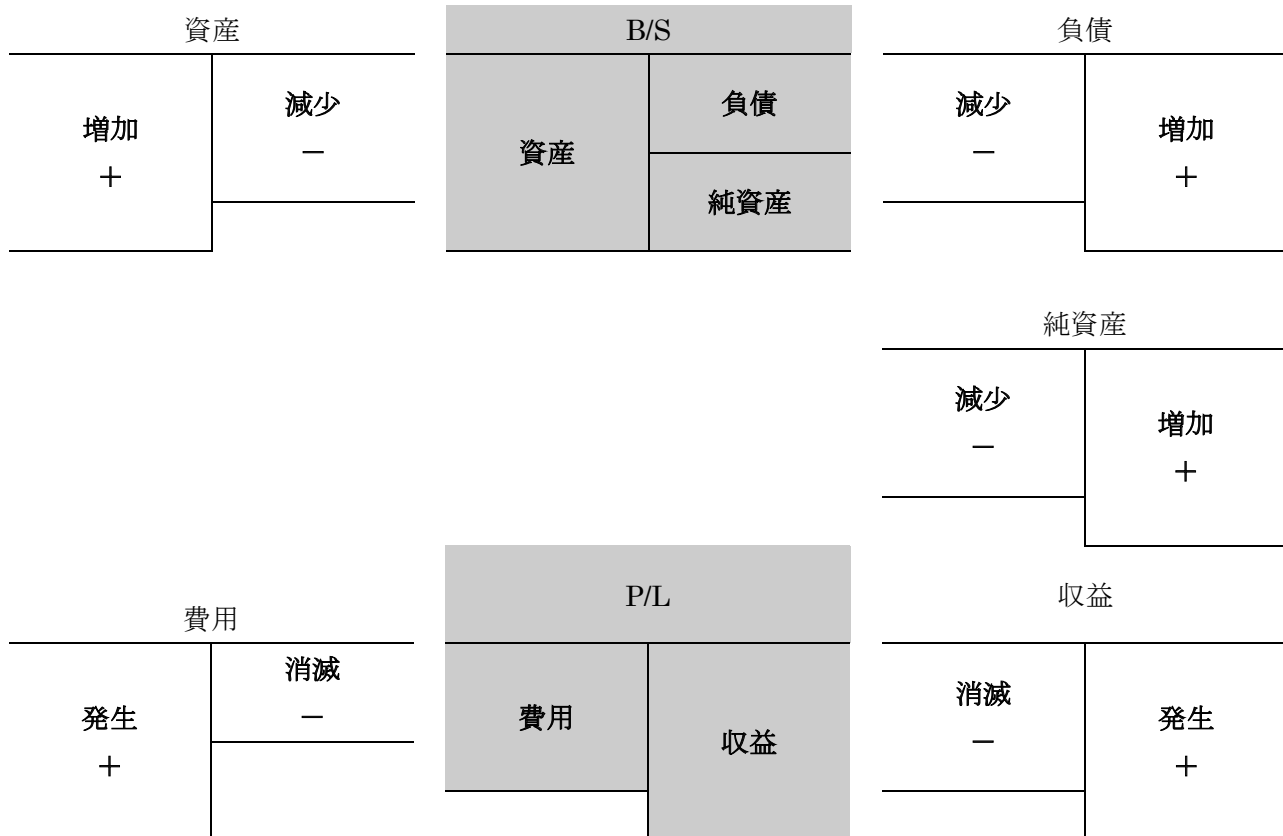
資産は貸借対照表の借方に存在する勘定ですので、増加したら借方、逆に減少したら貸方に記入します。

一方、負債・純資産は貸借対照表の貸方に存在する勘定ですので、増加したら貸方、逆に減少したら借方に記入します。

損益計算書の勘定も同じように考えます。収益は貸方に存在する勘定ですので、発生したら貸方、逆に消滅したら借方に記入します。

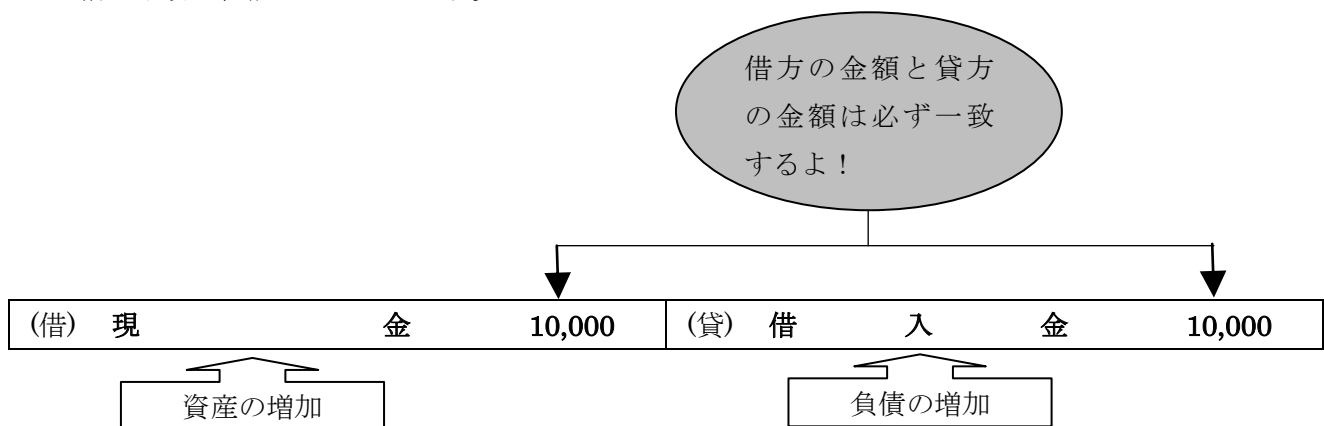
一方、費用は損益計算書の借方に存在する勘定ですので、発生したら借方、消滅したら貸方に記入します。

覚えよう！！

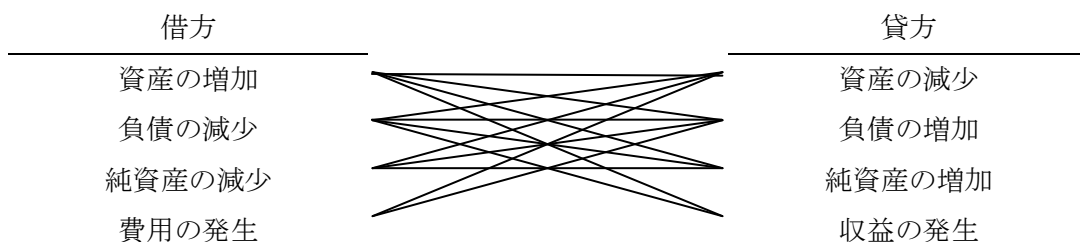


簿記上の取引を各勘定科目ごとに勘定に記録することで、最終的な報告書である貸借対照表や損益計算書は作成できます。しかし、取引内容が明確に読み取れない点や、記録のミスが起りやすい点などを考慮して、まずは**日付順、取引順での記録**を行っていきます。その記録方法を**仕訳**といいます。

仕訳は複式簿記での記帳の基本であり、**簿記上の取引を二面的に捉える**が必要になります。例えば、他人から現金を借り入れるという取引を行った場合、「現金」という**資産が増加**するとともに、「借入金」という後日返済しなければならない義務である**負債も増加**します。このように二面的に捉えることで仕訳も、借方、貸方の左右に分けて記録することができます。先ほどの勘定記入のルールを考えて、この借入取引を仕訳してみましょう。



簿記上の取引は以下の**8要素（取引の8要素）**の組み合わせから構成され、借方要素と貸方要素とが結び合わせてできています。この結合関係が取引を二面的に捉える仕訳および勘定記入の基本的法則になります。



仕訳を行った後は、その内容をもとに勘定に記入を行っていきます。これを**転記**といいます。**転記**はルール通り行えるように練習しましょう。借貸を逆に記入しないように注意してください。